



口絵 型絵染「クラコ」の表紙（左段上）と下絵の一部（5点）

(研究資料紹介)

東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館所蔵資料からみる
芹沢銈介作「クラコ」制作過程の考察

今野 咲

A study of the production process of *Kurako* by Keisuke Serizawa

KONNO Saki

キーワード：芹沢銈介 図案 広告デザイン

要旨

「クラコ」は1947（昭和22）年に発表された型絵染作品である。東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館（以下、当館）では、スケッチや下絵といった貴重な資料を所蔵しており、本稿の目的はこれらの関連資料から制作過程と図案上の特徴を検討することにある。「クラコ」には起重機のクラコを操作する工場作業員の姿がいきいきと表現されているが、スケッチ帖からは同様の描写が多数見つかった。さらに下絵から完成作への移行段階では、写実的描写が昇華され、装飾的かつ象徴的な広告デザインに発展するなどの変化が見られた。

Abstract

Kurako is a 1947 *Kataezome* (stencil dyeing) work by Serizawa Keisuke. Important sketches and drawings related to this work are in the collection of the Serizawa Keisuke Arts and Crafts Museum at Tohoku Fukushi University. The purpose of this paper is to consider the design and production process of the work based on these related materials. *Kurako* depicts factory workers operating a cargo crane. Numerous figures matching in composition and motif were found in a sketchbook of Serizawa's. As a further example, at the stage of transition from drawing to completion, the realistic depiction sublimates into decorative and symbolic advertising design.

はじめに

「クラコ」は、1947（昭和22）年に発表された大阪工機製作所の商品カタログである。『芹沢銈介全集 第1巻』（中央公論社 1980年）によれば発行部数は不明で、付録の暦（1947年1～3月、型絵染）は『芹沢銈介全集 第31巻』（中央公論社 1983年）に掲載されている。

大阪工機製作所は、戦時から戦後にかけてクレーンやコンベヤーといった荷役機械を製造販売していた会社で、戦後には松下電器や川崎重工業も参画した炭鉱機械化事業で業績を拡大した。創業者の小堀保三郎（1899-1975）は、栃木県河内郡明治村下多功（現河内郡上三川町多功）に生まれた。帝国通信社や大阪時事新報社で記者として働いた後、阪神電気鉄道株式会社の子会社である緑ヶ丘住宅建物株式会社の重役を務め、鉄道延伸に伴う宅地開発事業に携

わることで大阪財界との縁が深くなったという¹。

本作が芹沢銈介に依頼された直接的な経緯は判然としていないが、小堀保三郎と柳宗悦にはすでに面識があった可能性を示しておきたい。1942（昭和17）年6月15～18日にかけて、柳宗悦は関西に滞在しているが、その目的のひとつに大阪清交社で催された「民藝品小展覧会」と講演会「茶と美」への出席があった。『柳宗悦全集 第22巻下』（筑摩書房 1992年 244-245頁）収録の1942年6月18日付の河井寛次郎宛封書には、「大阪では珍しく一時間半の長広舌を振つた、元気に自由に話せた。小堀さん等の尽力は並々ならぬものだつた」と記されている。清交社は、1923（大正12）年に創立された会員制社交クラブで、堂島ビルディング9階に会館があった。1935（昭和10）年には美術同好会が組織され、「時

局下美術を通じて、民族精神、日本文化を正しく認識すべく新古美術の鑑賞、寺院古美術見学、或は斯界の権威者を招きて講演会を開く等真摯なる会を重ね一方茶道部を設け」²ていたという。同時期に発行された会員名簿には、小堀保三郎のほか、川勝堅一、小林一三、山本為三郎といった民藝運動を支援した関西の財界人の名を確認できる³。小堀保三郎が清交社を通じてすでに民藝同人との関わりを深めていたとあれば、その経緯から芹沢に制作依頼が舞い込んだと考えることは決して不自然ではないように思われる⁴。

当館が所蔵する関連資料には本作のスケッチ帖と下絵が含まれている。写生から始まる芹沢の創作活動において、スケッチから下絵、そして型染の作品へと、その造形的展開を知る貴重な資料といえる。本論では、各資料の概要を示した上で、制作過程や図案上の特筆すべき点について考えてみたい。

1. 当館資料の概要

当館には5種類（図1）の関連資料（資料A～E）が収蔵されている。各資料の概要は下記の通りである。



図1 関連資料5種（上段左から資料A～E）

【資料A】 スケッチ帖

（21.3×15.3cm 洋紙に鉛筆 平綴本 全55図）

工場の外観図に始まり、工場内部の機械、機械を操る工場作業員、そして再び工場敷地内の建物や大型クレーンをとらえたスケッチで構成されている。機械の細部を描いたカットには、ひとつのモチーフを複数の角度から模写したものも少なくない。また綴本とは別に原稿用紙が3枚挟み込まれており、その裏面には、芹沢直筆と思われる宣伝用文章（表1）が書かれている。9つの文章は、頒布版の8図と同じもののほか、後述する資料Cの英語の原文とみられるものもあった。

紙面上の理由からスケッチ帖の全図を掲載することはできないが、次節以降その一部を取り上げて紹介したい。日付なし。

【表1】 資料Aに付随する宣伝文

1	クラコ 起重機の専門工場が簡易な手捲起重機の創案に最良の技術を傾注して生み出した新しい起重機です
2	クラコ 電動起重機とチェンブロックの中間の役割を特徴として生まれた新しい起重機です
3	クラコ 機械の組立・修理・摺合・芯出に電動起重機を使ふのは無駄です
4	飛行機 発動機の取つけ取はずしはクラコの移動性がものを言ひます
5	機械修理 なまなかの工夫や助手の力手を借りるより操作の簡単なクラコを相手にやる方が遙かに頭脳的です
6	機械加工 加工素材の取つけ取はずしは電動起重機が能率的ですがそれは設備あつての話です
7	重量貨物 一頓前後の重量貨物の荷役は電動起重機があれば申分ありませんが三又を組みチェンブロックを懸ける手数を思ふとクラコは簡便です
8	機械組立 手捲である方が却って仕方を軽快にさせこの点は寧ろ電動起重機を使ふより能率的です
9	芯出 定盤の上の仕方に電動起重機を使ふのは兎も角無駄です

※実際の表記に倣い、一部分を矩形で囲んで記載した。

【資料B】 下絵 [図2-1~10]

（洋紙に墨・水彩・鉛筆 27.6×20.7cm 中綴本 全22図）

後述する資料Cとサイズに近い手製綴本に、肉筆で描かれた下絵である。表紙・前扉・後扉・裏表紙（図2-1, 2, 7, 8）については直に描き込まれているが、その他は和紙に描かれている。和紙は、綴本に貼り付けられているものと、図2-9, 10のように綴本に挟み込まれているだけのタイプも複数ある。日付なし。



図2-1（表紙）

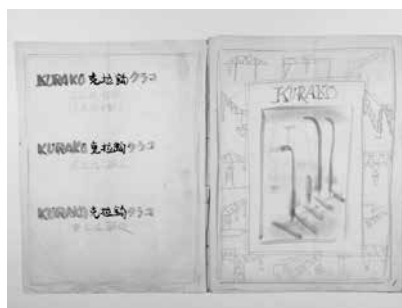


図2-2（前扉）



図2-3



図2-4

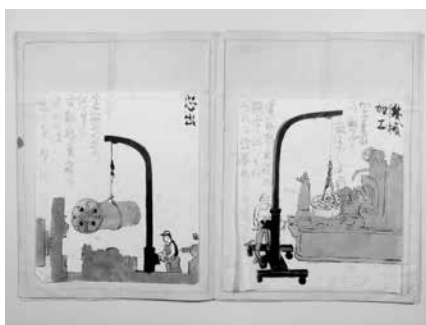


図2-5

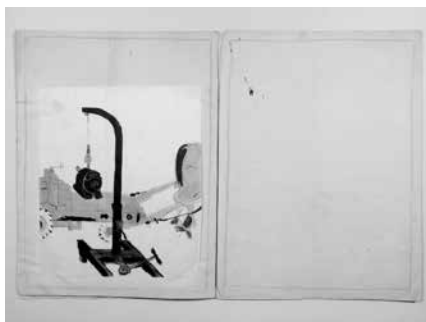


図2-6

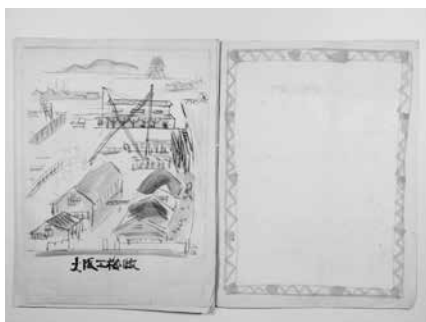


図2-7 (後扉)

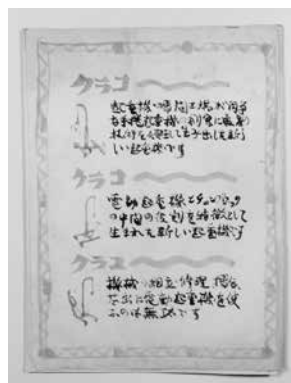


図2-8 (裏表紙)



図2-9 別紙の下絵 (一例)

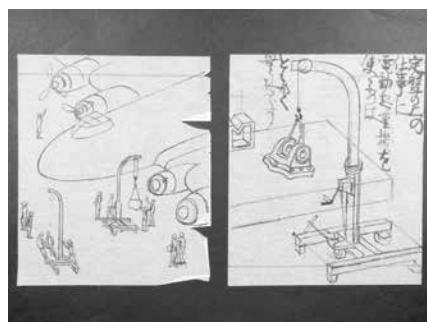


図2-10 別紙の下絵 (一例)

【資料C】 クラコ [図3-1~3]

(型絵染 28.0×21.3cm 和装袋綴仕上 全8図)

『芹沢銈介全集 第1巻』(中央公論社 1980年)に記載された型染本(27.5×21.4cm)とほぼ同寸であることから、頒布版と考えられる。頒布版の全8図にはもともと、商品の日本語宣伝文が型絵染で表現されているが、資料Cには別紙の英訳文が貼り付けられている。タイプライターで打った文章をそのまま貼り付けたとみられる(図3-1~3)。扉絵の役割をもつ第1・8図は、とりわけ余白が目立つ構図であるが、本資料の当該ページ(図3-1, 3)には、商品の紹介文や会社概要を記した英訳文が貼り付けられている。また図3-2のように芹沢銈介直筆と思われる中国語訳(別紙)が貼り付けられているページが複数あった。以上のことから、英語版と中国語版の制作が予定されていた可能性があるが、現時点でその存在は確認できていない。

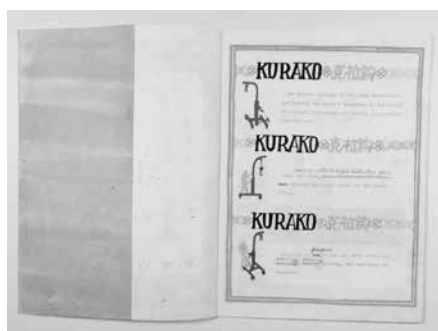


図3-1 英訳が貼られた前扉（頒布版の第1図）

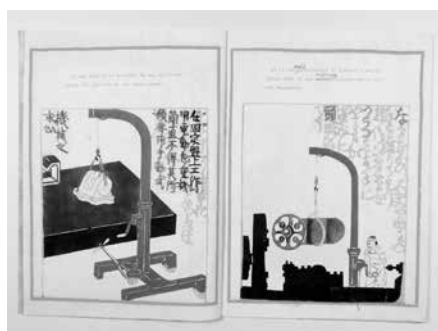


図3-2 英訳・中国語訳が貼り付けられた図の一例（頒布版の第2-3図）

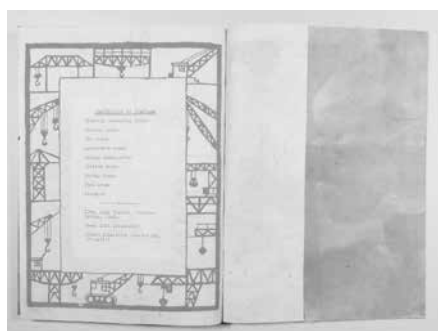


図3-3 英訳が貼られた後扉（頒布版の第8図）

【資料D】 クラコ（大判）

(31.5×23.0cm 和紙に型絵染 全4図)

縦横ともに少々大きい寸法の和紙に染められているが、頒布版に図版上の相違はない。収められているのは頒布版の第1～4図のみである。

【資料E】 写真（全9枚 付属品：封筒）

頒布版と思われる「クラコ」の全図と付録の暦を撮影した写真で、裏面には写真のトリミング位置を指示したとみられる寸法の書き込みがある。

2. スケッチ帖と下絵の比較：観察視点の発展

スケッチ帖に収められている55図を主題ごとに大別すると、(1) 敷地内外の建物・設備の素描が17点、(2) 工場内観図が1点、(3) 機械及びそれを操作する作業員の姿が37点になる。大阪工機製作所には、複数の建物と、近隣家屋を優に上回る大型クレーンがあったようで、工場内観図における人間のスケール感覚からいっても、広い敷地を有していたと推測される（図4-1~2）。商品カタログであるからには、手巻き起重機としてのクラコの用途や利便性を伝える必要があり、(3) のような実際の作業風景が主軸になるのは当然であるが、働く人々の生き生きとした姿に着目したスケッチも複数含まれている（図4-3~4）。また起重機そのものというよりは、運搬される側の荷物や機械に対して、複数の視点から細部まで写しとろうとする姿勢が見受けられる。歯車や大型モーターのような機械部品が、吊り上げる際の縄の結び方までも、丹念に描かれている（図4-5）。馬が引く荷台は、最多の6図にのぼる。荷台側面の金具に高い関心があったとみられ、金具の形状の差異を部分ごとに細やかに写している（図4-6）。その一方、(1) の屋外風景では細部への視点はほぼみられず、どちらかといえば大掴みに素早く描きとめた印象が強くなっている。

これら55図のうち5点は、下絵の段階になってもほぼ同様の構図（表2）で採用され、機械の細部に焦点を当てた複数の断片的スケッチも、下絵の段階で再構成されながら引き継がれた。下絵段階には、表紙と扉絵をのぞき、輪郭を線描したタイプ（図2-10）と墨や水彩でべた塗りしたタイプ（図2-3~6, 9）の2種類が存在している。どちらも和紙の別紙に描かれているが、後者は綴本に糊で貼り付けられている。さらに型染での彩色が念頭にあったためか、クラコ本体は墨色、その他の機械は灰色、人や馬には茶色を使うという具合に、統一感のある色選びになっている。それに伴い、スケッチ段階での細やかな描画は、全体に平面的かつ簡易な描写へと変化した。とくに先述した馬の後方の荷台であるが、ハンドルや突起が付いていたはずの金具は、完成作同様の装飾的シルエットへと抽象化している。また表1で示した宣伝文が、それぞれの図と同化するように挿入された。

下絵の表紙（図2-1）には、クラコのフック部分と吊り下がった荷物が象徴的に描かれている。両翼を広げた鶴のイメージからは、絵馬にも似た印象を受ける。鶴の描画はスケッチ全55図の最後ですでに確認でき、ジブと呼ばれるクレーンの伸縮部と共に描かれていた（図4-7）。天高く伸

びるクレーンから鶴の飛翔が連想されたのだから、家紋の鶴丸紋に近い表現になっている。前後の扉絵と裏表紙（図2-2, 7, 8）には、ジブのパイプトラス構造が装飾枠として図案化され、このうち後扉（図2-7）には大阪城を背景に工場敷地内の鳥瞰図が描かれた⁵。クレーンやジブは墨描きの上に朱色で彩色（口絵参照）されているが、こうしたジブの朱色表現は完成作に踏襲されていく。



図4-1 工場内部の様子



図4-4 作業員の姿



図4-5 吊り上げられた機械部品

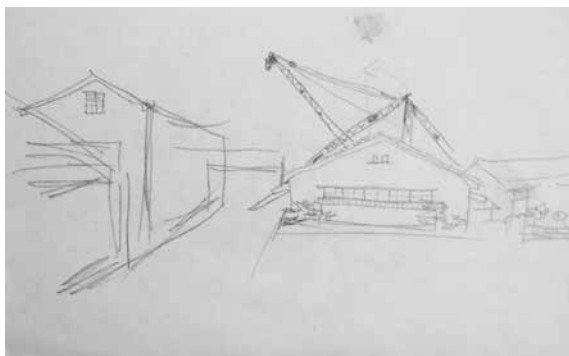


図4-2 工場敷地内の様子

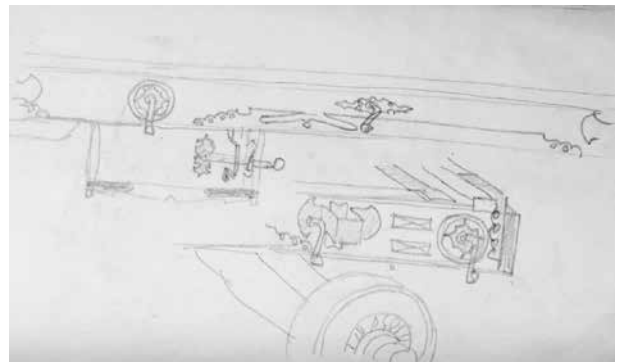


図4-6 荷台の金具を描いた図（全6図）の一例

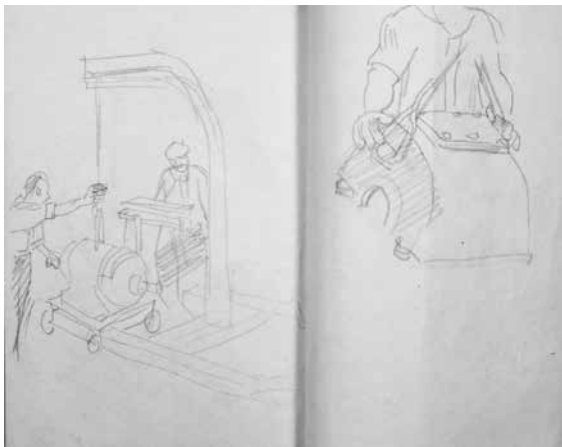


図4-3 働く人々の姿

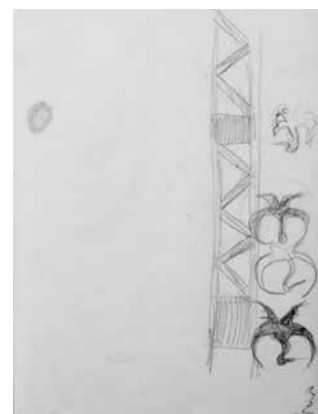


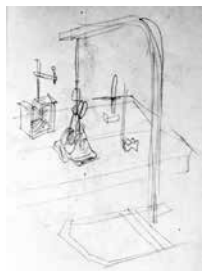





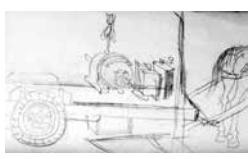



図4-7 クレーンのジブと鶴の描写

[表2] スケッチと下絵に共通する構図

	スケッチ	下絵
1		
2		
3		
4		
5		

3. 下絵と完成作の比較：イメージの改変と装飾性の付加

『芹沢銈介全集 第1巻』に掲載された完成作と下絵を照らし合わせると、採用されなかった図や改変された図案が複数あった。二人の作業員が大型モーターを囲む様子(図2-3の左)と、丸太状の荷物をレール上の荷台に移動する様子(図2-9)は、完成作では失われた図案である。その理由は一連の資料群から伺い知ることができないが、前者に関していえば、大型モーターを移動する図案は完成作の第4図目にもあるため、重複を回避した可能性もあるだろう。このほか、下絵の後扉にあった工場の鳥瞰図も失われ、下絵段階で前扉にあった装飾枠(図2-2の右)が最終的な後扉となった。すでに述べたように、この装飾枠のなかには英文の会社概要が入る予定だった。一会社が発行する商品カタログとして、最低限の情報掲載は必要であり、全体の構成が整う過程で図案の取捨選択が行なわれたと考えるのが自然だろう。なお、[表2]の下絵は完成作まで引き継がれた。

下絵段階で表紙の中心にあった鶴のイメージは、完成作では図案上の大幅な改変が加えられた。クラコを左手に配する構図はそのままだが、フック部分が右上に移動され、中心イメージがローマン体の「KURAKO」になった。その下もやはり欧文表記であり、カタカナの併記もあるが、全体的に西洋的傾向が強くなっている。ローマン体は、その装飾性に加えて、型紙に図案を起こす際の「吊り」の役割も果たしているようだ。同様の役割は朱色の枠にもみられ、枠内外の文様や文字が有機的に繋がるような一体感ある効果を生んでいる。

完成作には、こういった型染技法に即した図案の発展のほかに、同時期の作例に共通する文様を見出すことができる。表紙および前扉に表れる組紐文様やひねり紐文様(図5-1, 2)である。一般にこれらの文様は、古代から中世にかけてキリスト教圏で普及した装飾文様と理解されており、浮彫やモザイク装飾といった建築分野の他、彩飾写本にも多様な広がりを見せた。中世彩飾写本の代表格と称される『ケルズの書』は、ケルト独特の複雑な組紐文様で名高い。文頭の頭文字を動植物や人物で装飾する装飾頭文字といった、いわゆるミニアチュールの世界観が中世ヨーロッパで形成されたのはよく知られている。

芹沢の作品、とくに戦中から戦後まもなくの図案をみると、型染カレンダーと装幀の仕事に、これらの影響を見て取れる。例えば、雑誌『読書人 1月号(第2巻第1号)』(東京堂 1942年1月)の装幀(図5-3)は、矩形状に交わる紐と弧を描く複数の紐が絡み合う文様が印象的な作品であ

る。また1946（昭和21）年より制作が始まった型染カレンダーでは、とりわけ1950年版までのものに、組紐文様や装飾頭文字を思わせる図案（図5-4、5）が散見される。中世美術への関心については、後年に型染カレンダーの仕事を回顧した芹沢も「この時期（著者註；制作を始めた頃）、中世の美術、特に古写本、挿絵等に心酔していたので図柄は中世風を追うことになった」⁶と語っている。また既に指摘したように、紐への関心はスケッチ帖にも垣間見られ、起重機から下がる縄の撚りや結び方を細やかに描いた素描は5点ほど確認できる⁷。

さらにもうひとつ、完成図案における文字の装飾的表現についても述べておきたい。完成作の第2-8図では、詞書と工場の作業風景がひとつの図案に収まっているが、こうした表現は、「クラコ」の制作以前から取り組まれている。卷子本「武州小川紙漉村」（1938年）や「益子日帰り」（1943年）といった、戦中に本格化した染紙の作品である。とりわけ「益子日帰り」では、詞書が草書体特有の強弱のあるやわらかな曲線で表されており、益子の風景や人々の描写と美しく溶けあっている。「クラコ」の場合は、同作のように詞書が画面上で点在することはなく、外枠にそった規則性ある配置によって読みやすさが重視されているが、草書体による詞書と絵画性の調和という共通課題があったと推察される。



図5-1 紐文様の装飾



図5-2 組紐文様の装飾



図5-3 組紐文様の装幀図案

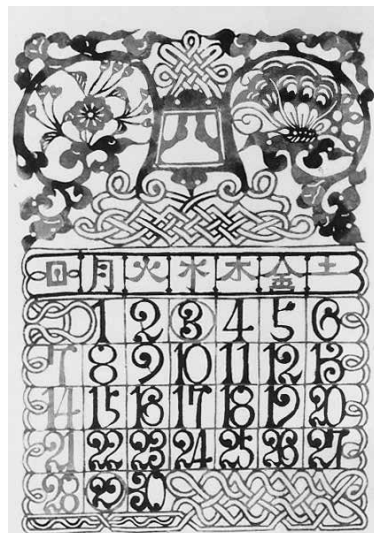


図5-4 1946年4月の型絵染カレンダー



図5-5 1949年1月の型絵染カレンダー

おわりに

スケッチ帖から下絵、そして完成作を辿っていくと、構図がほぼそのまま引き継がれた図が、複数存在していた。写生した個々のモチーフ（主に機械部品）を再構成したパターンも含めると、その多くが実際の図案へと発展した。構図として全体像を掴み、同時に細部にも深い関心を寄せて、対象を統合的に捉える姿勢が伺える。その一方で下絵と完成作を比べると、制作時期を前後する作品との類似性が見受けられた。写生から発展した下絵に、創作活動に通底する技法やモチーフの探求が加わったことで、さらに装飾的な図案へと昇華されたのではないだろうか。

芹沢の類まれな観察眼や描写力は、その制作を間近で見てきた柳悦孝や岡村吉右衛門も舌を巻くほどであった。『民藝 第383号』掲載の「座談会 芹沢銈介の仕事」（1984年11月 2-11頁）において、柳悦孝は「一枚一枚の下絵というのは実に早いんです。あっという間にできちゃう。それをあっという間にかきかえる。ですから、あのころは、

紙がいくらあったって足りなかったに違いないですよ」と語り、岡村吉右衛門は「観察力は細かでしたよ。非常に細かい」「根底には実に丹念な観察と、ドローイングがあるんだ」と述べている。ただ本作の人物表現については、全く同じイメージは存在せず、スケッチを経て芹沢自身のなかで生成されたとみられる。この点で、幾何学的図案に置き換えられたジブのトラス構造もまた、より広義に大阪工機製作所の事業をシンボライズするために、取材スケッチをもとに抽出されたと見ることもできるだろう。

スケッチが線描を主にする一方、下絵はそこに色面を加える作業となる。観察によって瞬間的に掴み取った大まかな印象や丹念に写し取られたディティールは、描き手の関心を直接的に表すものだが、型彫りや色差しへの発展を考えたときには、必ずしもそれを全て生かしきれないわけではないだろう。スケッチから下絵へのステップは、スケッチで掴んだイメージを色面の要素で抽象化しながら、線と面を織り交ぜた確固たる構成へ導く作業といえる。いいかえれば、スケッチにおける細やかな観察と描写があつてこそ、下絵段階で具象と抽象を自由に往来できることになる。先述の柳悦孝の発言には、まさにその往来のなかにいる芹沢の姿が想像され、「練り上げ、整頓をし、完成させてゆくと、とき、滾々とした生命力があふれてくるまで描き込み続ける、というのが芹沢式」⁸と評した岡村吉右衛門の言葉にも深い共感を覚える。この点で、「3. 下絵と完成作の相違点および装飾的発展」で紹介した、完成作にはない下絵（図2-9）の存在は示唆に富んでいるように思われる。本下絵は、スケッチ帖に同様の描画を確認できたのだが、構図をラフに描いたのみで、他の図案のように線描による丹念な個々のモチーフ描写はなかった。画面を斜めに横切るルールに構図の動性があるが、スケッチ段階から色面の印象が強く、他に比べて図案としての発展力が弱かったと解釈することもできるだろう。

付記

本稿で紹介した芹沢銈介作品の掲載にあたり、芹沢恵子様の格別のご配慮を賜りました。また執筆に際しては、濱田淑子様に多くのご教示を頂きました。英文要旨は、東北福祉大学のKen Schmidt教授にご協力を頂きました。ここに厚く御礼を申し上げます。

主要参考文献

『芹沢銈介全集 第1～31巻』（中央公論社 1980-1983年）
『芹沢銈介装幀集』（1970年4月 吾八）

『柳宗悦全集 第22巻下』（筑摩書房 1992年）
柳宗玄『岩波美術館 歴史館 第4室 中世ヨーロッパ』（岩波書店 1985年）
鶴岡真弓『ケルト／装飾的思考』（ちくま学芸文庫 1993年）
金沢百枝『ロマネスク美術革命 新潮選書』（新潮社 2015年）

画像出典

口絵、図1~4、図5-1~3、および表2の画像はすべて筆者撮影。
図5-4~5は東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館の所蔵。

註

- 1 小堀保三郎の経歴は「財界人物誌 大阪工機社長 小堀保三郎氏」（『日本経済新報 第4巻第33号』日本経済新報社 1951年11月 21頁）や「事業のフェニックス 大同輸送機工業・小堀保三郎の場合」（『日本経済新報 第10巻第21号』日本経済新報社 1957年7月 52-53頁）に詳しい。
- 2 『清交社社員名簿』 清交社 1942年 175頁
- 3 註2で示した名簿（『清交社社員名簿』 清交社 1942年）には、1942年10月末時点での会員情報が、氏名・所属・住所・電話番号の順に記載されている。
- 4 『真岡新聞』（2017年4月28日付 真岡新聞社）によれば、棟方志功は1942年頃に小堀保三郎の生家の離れに滞在していた。近くの多功不動尊を主題にした版画作品のほか10数点が同地に現存しているという。また棟方志功の自伝『板極道』（中央公論社 1964年）によれば、棟方志功と小堀保三郎は、稀覯本を専門とする大阪・難波の十二段家書房で知り合った。十二段家（京都）の店主・西垣光温が営む同店の二階を大阪での寄留地としていた棟方志功が、顧客の一人だった小堀と出会ったようだ。小堀は棟方の絵や版画を好み、店を訪れるようになったという。
- 5 大阪工機製作所の住所（大阪市城東区今福中3丁目12）を『大阪市街図』（日本地図 1947年）で確認すると、現在の大阪市城東区今福東1・2丁目付近に相当することが分かった。同地図には戦災焼失地区も記録されているが、工場は一步手前で被災を免れたようである。なお鳥瞰図のうち左手を流れるのは城北川で、そこに架かるのは今福大橋と考えられる。
- 6 『芹沢銈介装幀集』（1970年4月 吾八）第7回頒布分付録の「近況おしらせ」より一部抜粋。
- 7 紐を主題にした作品は、「ねじり文 染裂」（1946年）や「ひも結び文」（1946年）、「組紐文卓布」（1950年頃）、「組紐文のれん」（1960年）といくつか存在し、芹沢の関心事項のひとつであった。
- 8 岡村吉右衛門「ゆったりとした質感と奔放な筆致」（『芹沢銈介全集 7巻』（中央公論社 1980年 161-173頁）